

① 10月15日(土) 圓生(三遊亭) 六代目



1900年	大正	百川	鼠穴
9.3	阪札	(ももかわ)	(ねずみあな)
↓	出付	1978年	1972年
1979年	身	4月25日	11月28日
9.3		32分53秒	43分57秒

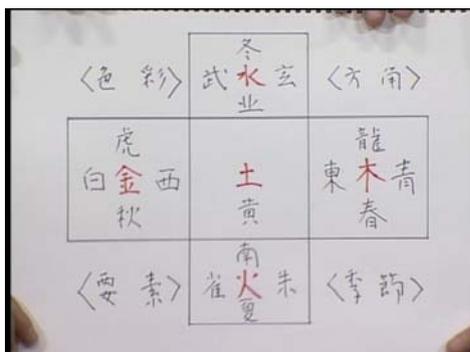
② 百川

落語。田舎(いなか)から出てきた百兵衛は、葎町(よしちょう)の千束(ちづか)屋という桂庵(けいあん)(口入れ屋)からの紹介で日本橋浮世小路の会席料理屋「百川」に奉公することになった。最初の日にたまたま羽織を着ていたため、河岸(かしの)若い衆が飲んでいる2階の部屋へ用を聞きに行かされ、田舎なまりで「わしは主人家(しゅじんけ)の抱(かか)え人」というと「**四神剣(しじんけん)**の掛け合い人」と取り違えられる。祭礼用具の四神剣を質に入れてしまったので隣町から掛け合いにきたと思われるなど、ユーモラスな会話(やりとり)が続く。ようやく間違いがわかり、今度は長谷川(はせがわ)町の三光新道(さんこうじんみち)へ常磐津(ときわす)の歌女文字(かめもじ)師匠を呼びにやられる。ところが百兵衛は鴨池(かもじ)玄林(げんりん)という外科医の家へ行き、「河岸(かしの)若(わ)け衆が今朝(けさ)がけに四、五人来(き)られやして」という。医者(い)者は「袈裟(けさ)がけに斬(き)られた」と思って飛んでくると歌女文字(かめもじ)の間違(まち)いとわかる。「**抜け作(ぬ)め**」「どのくれえ抜けてます」「みんな抜けてらい」「そうかね? か、め、も、じ……か、も、じ……いやあたった一字(いち)だけだ」。

6代目三遊亭圓生(えんしょう)の十八番であった。〈関山和夫〉(小学館 スーパー・ニッポニカ2001)

③ TBS「落語研究会」1998年5月11日放送

山本文郎(アナウンサー)(写真左)、榎本滋民(劇作家)(写真右)の対談による解説がこの番組の名物でした。以下は「百川」の放送時の、**四神剣**の解説映像です。



④ 「鼠穴」の鑑賞

井原西鶴「日本永代蔵」(1688年刊)巻一の三に、**サンダラボッチ**を作ったんだんに出世する話がある。また、銭さしを商家に売り歩いて小金を貯め、資本を蓄える成功譚は落語「塩原多助一代記」(円朝作)も同様な話と言えよう。

次々と、商売の品物を高価なものに換えていくあたりは、「宇治拾遺物語」や、民話で知られる「藁(わら)べ長者」の展開を思わせる。

旦那が**鼠穴**を非常に気にするのは、蔵は火事に対して強いのだが、鼠穴から火が入ると、たちどころに燃え広がることがあるからである。したがって、火事の際は鼠穴の目塗りに気をつけるのだが、それを怠ってしまったのである。

(延広真治編 落語の鑑賞201 新書館 2002年)

⑤ 79歳の誕生日にパンダと同じ日に亡くなった圓生



朝日新聞 1979年9月4日 朝刊

一面の右隅に、「**落語の円生師匠、誕生日に急死(23面)**」とある

⑥ 落語の歴史 中 (参考文献:小西甚一 日本文藝史)

明治5年から15年にかけて田鎖綱紀が西洋風のステノグラフィから日本語に使えるような記号体系を案出した**速記術**を開発し、**三遊亭圓朝(1839-1900)**の人情噺「怪談牡丹灯籠」が速記され、それを坪内逍遙が二葉亭四迷に「圓朝の口演を手本に書いてはどうか」と勧め、「**言文一致**」という語体の問題として意識されたかもしれないが、じつは作中の臨場感こそ主眼なのであった。すなわち、話芸の与える臨場感が、二葉亭四迷に採りこまれ、新しい小説表現の創造に役立った。圓朝の噺の数々は速記によって残り、全集8巻にまとめられ、現代の落語家(志の輔など)もその恩恵を被っており、近代落語中興の祖と尊敬されている。